第一中学校区

三階節

三階節は柏崎名物の一つである。宴会が正に終らんとする時必ず歌う習慣になったのは、三階と散会との語呂が似ているからであろうか。

承徳のころ、下町専福寺に法話のじょうずな僧侶があって、この僧の説教を聞いた人々が感激して、

「出家さ出家さと恋にする　出家さあ　出家さの御勧化山坂こえても参りたや」

と唄ったのが三階節の始めだと伝えられている。

一説には、その僧の名が「繁さ」であったとか。

注　市観光室の柏崎伝説にもあり、福泉寺の僧という。

諏訪神社

その昔、謙信と信玄が十数年、川中島で相争ったが勝敗が決まらないので両方から勇士を出して力くらべをして、勝った方が信濃四郡の主となろうと相談した。

そして越後から長谷川与五左エ門、甲州から安間彦六が出て力くらべをすることにした。謙信はスワの神に祈り、

「もしこの勝負に勝たし給えは、越後の国中に諏訪の神霊を一万ケ所おまつりしましょう。そしてお祭りの日はすすきのはしで朝飯を食べることにして、御恩にお報いしましょう」

越後の国が勝つや、謙信は方々に諏訪社を建てた。その時、柏崎の諏訪社（今の柏崎神社）も建てられ、この日春つけた鰛の塩漬けをすすきのはしで出す習慣が生まれた。

昔は住吉は三月二十三日、祇園は六月七日より、諏訪は七月二十七日尾花祭りと定っていた。

二十七日スワ祭り　踊り踊りの中にも　子ども衆が四・五人、よくそろた。

蓮田の子守地蔵

福厳院に安置してある延命子安地蔵尊は今から千二百年前、弘法大師の作と伝えられている。

昔、甲斐の国の大守が数代引続いて、この地蔵尊を信仰されて、霊験あらたかだったので、このご利益を大ぜいの人にも施してもらおうと、忠久という僧都（そうず）にせおわせて、諸国を行脚させた。巡り巡って柏崎の蓮田に来た時、盤石のように重くなって、背負っていることが出来なくなったので、忠久僧都はこの地に一堂を建立して、供養することとなった。

その後、赤田の城主斉藤下野守の奥方が難産した時、この地蔵尊にお祈りして若殿を安産した。

そこで、斉藤氏は寺を建てて、延命地蔵を安置したという。

常福寺と毘沙門天

延暦年中、上条の佐水の関矢喜右エ門の僕童、房太郎という者が「鮓が沢」にかくれて、悪い事をし、日増しにそれがこうじて村人を困らせた。

ちょうどその時に伝教大師がこの地においでになった。房太郎は暴力をもって大師を迫害しようとし、大師は法力でもって之を捕え佐水と野田の境の山に房太郎を埋めた。後人これを房太郎山という。

その麓に房鬼山常福寺という寺を建てて、椿の古木で毘沙門の仏像を三体作り、上を高原田、下を浦佐、中をこの寺に安置した。

この常福寺、天正十一年に柏崎に移し、柏葉山常福寺という。

（注）房太郎の話は柏崎の伝説（市観光室）にもあり。

田の頭

天保十五年、三島郡田頭村の為右エ門、浜の溜水を利用して池の東南に田地を起し、池には鯉魚を飼い、池の西南に為右エ門の住所をおいた。この辺を田の頭というのはそのためである。

甲子楼主人の幼少のころ、満々とした池があり、蓮あり、田もあったという。藤巻のせがれ、西巻のせがれが水死したところとも言われているが明治十六・七年のころ全く砂にうまって消滅したという。

市川稲荷の力自慢

市川稲荷は、なかなか御利益のある稲荷様であるが、願をかける人はこの市川稲荷さんと力くらべをしなければならないとされていた。願をかける人は稲荷さんの前の石の造りものを力づくで、こわさねばならない。稲荷さんがこわれないように抵抗をつづける。これをこわさなければ願い事はかなえられない。

ある時、市川稲荷と青山稲荷とけんかした事があって、市川稲荷が勝った。それから青山稲荷が柏崎に出る時は必ず市川稲荷の許しを得ると約束されたという。

稲垣の血槍

昔、長岡に稲垣という槍の名人がいた。

彼が病死したとき、その夜、夢じらせに母の枕元にたって、

「おれは柏崎えんま堂のえんまと戦い、えんまを突きとめたから秘蔵の槍を見てたしかめよ」

と言われたので目ざめて槍をみると、血がべったりついていた。

そこで使を走らせて、柏崎のえんまさんを調べてみると、

「ゆうべ堂内で闘争した気配があったので調べてみたら、えんま大王の胸に槍きずがあり、この通り赤い血が流れている」

と話したので一同不思議に思い、それから稲垣の血槍の名は高く

なった。

※そのえんまの木像は明治七年火事でもえた。

（注一）　長岡藩士　板垣権右エ門

柏崎えんま堂を中心に、堂の浦の浜を功徳浜という。北の海に鳥居のような岩があって、これをえんま堂の北門鳥居としていた。並び出し岩は形が秤に似ているので業の秤という。鏡沖を浄玻璃鏡といい、田の中に常に陰火の気あるので地獄の火となづけた。その他、塔の下、不叶の橋、死出の山、鬼穴、誓が淵など地獄図に関係した地名が各所にある。

（注二）

柏崎の伝説（市観光室）伝説集（桑山太市著）にもあり。

笹葉の聖天

遍照寺三十三代の住職憲精という人の時に酒好きの寺男がいた。ある日、聖天さんにあげる酒買いに行った帰りに酒の香につりこまれて、みんな飲んでしまった。

寺男は徳利に水をつぎ、口元に笹の葉をさして、知らぬ顔して聖天さんにあげた。その晩、寺男は熱をだして「聖天さん、ごかんべん下さい」とうわごとを言い続けたとか。

（注）　三宮ときより伝承

聖天さんは、ゴショデンさんと尊称し、流行病の時、町内を廻っていただくと流行病がはいらないと信仰されていた。

（注二）　戸川憲美氏の話

寺男が笹薮に酒をチョッピリついでそれから飲んだ。和尚が水くさい酒をせめて、寺男をせっかんしていると、聖天様が現われて、「さっき笹薮で寺男から飲ませてもらったからそんなにせっかんするな」といわれた。

月皓いなり

昔、遍照寺大門に豆腐屋が一軒あった。朝早く起きて豆腐をつくり、それから雨戸を開けて商売するのだが、いつも雨戸をあけないうちから、一人の僧が買いに来て待っていた。う蘭盆の近づいたある日のこと豆腐屋のおかみさんが病気で寝こんでしまった。これを知った僧はある日、蓮の花をたくさん持って来て、「これを売って豆を仕入れなさい」といった。

おやじはそれを売り、いつもの通り豆腐を作ることが出来た。この僧は月皓いなりの化身だという。

向う横丁のおいなりさんエ　一銭あげて渋茶よこよこ横目でみれば、米の団子か　土の団子か　とうとうとんびにさらわれた

（手まり歌）

さいほうかみの子　お稲荷さんのごりやくだ　あげやっしゃい
あげやっしゃエ　猫の目でもあげやっしゃい」

猫の目とは五銭白銅貨を言うので、稲荷さんの賽銭も一銭から五銭に値上りした事が童謡にもあらわれている。

飴を買う幽霊

下町の飴屋に毎夜、赤ん坊をおんぶした女が飴を買いにくるので、怪しんだ飴屋がある夜この女のあとをつけた。

女は買った飴を背中の赤ん坊に与え子守歌などを歌って嬉しそうにズンズンと妙行寺の墓場の方へ行き、ツイと消えてしまった。見るとそこに新しい墓があった。

飴屋の話に、その墓を掘って見たら死んだ女の側に生まれて幾日もたたない赤ん坊が手足を動かしていたと。

そうめん屋のお化け（その一）

享保のころ、法華堂下町（今の妙行寺裏手）に住んでいた某の娘、ある日ざると庖丁をもって畑に茄子をもぎに行ったまま行方不明となり、程経て柿崎の竹が鼻へ死体となってあがった。

その後宝暦年間に大火事で家は焼け、某は立ち去りその後へ船頭甚右エ門が家を新築して住んだが度々怪しい事があるので他所へ移り家は荒れて化け物屋敷と呼ばれた。

そこへ名木山某の隠居や仙台屋文蔵などが移り住んだが、いずれも恐れて去り、かわってそうめん屋某が住んだ。このそうめん屋が所用で柿崎の竹が鼻を通りかかった時、馬があばれ某は落馬して死んでしまった。その後二人の子どももなくなった。世話するものがあって能登の国生まれの平吉が入婿となったところ、十八九の女の亡霊が現れて（午前三時ころ）ぜひ出家してほだいを弔ってくれと平吉の髪をひっぱって抜いてしまった。翌朝平吉が自分の髪をさがすと墓場に落ちていた。こんなことが度重なったので、西永寺の僧を招いて厚く仏事を行ったところ、女の亡霊があらわれて、よく法事をしてくれた。この上はこの屋敷を守って先祖のあとを立ててくれといったという。それからは変事がなくなったという。

そうめん屋のお化け（その二）

文化七年の夏、法華堂下町のそうめん屋山岸平吉の宅にまたまた幽霊が出て大騒ぎになった。

平吉が町役所に申しあげた中に、五日の夜またまた同じ時刻に女が先夫と子どもを連れて現れて、「ぜひ私の願いを聞いてくれ」と言い、子どもは私のからだに手をかけ責め、先夫は氷のように冷たい手で私の髪を引きちぎった。目玉がとび出る程の痛さであった。翌朝私の髪がなかった。椽板まではぐって見たが見つからない。もしや墓所にないかと思い、墓所に行って見ると本家の墓と私の墓の間にあったと書いてある。

下町のいたち

下町にいたちが住んでいて、若い者を化かし、井戸側を女郎屋の

はしご段にみせかけ、若者はそのはしごを上るつもりで井戸の中に落ちたという。

※柏崎にはこの外

○山田小路にいたちや狐があらわれていたずらしたり

○新助町の古井戸（北野屋前あたり）にいたちがすんでいたり

○浄願寺の古榎の洞中にいたちがいて人を化かしたという。

○御蔵小路（朝倉小路）のいたちは

「子ども来い来い　あづきといで見せる。」と言って近よると小石をパラパラ投げたと伝えられている。

浄願寺のおたつ

浄願寺の子守りにおたつという女があった。十二三才のころ、伊勢神宮にぬけ参りをした。そのついでに京都にのぼり宮中の女官になった。

ある年、浄願寺の住職が上京した時、宮中の門番にそのことを話したところ、おたつの耳に入り面会を許された。

大変ごちそうになって、紋付きのちょうちんや輿（こし）を与えて六条のはたごやまで送り届けられた。

たつ女は後、九条家の御子となり、女御（更衣か）に立ったといわれている。

明蔵寺清竜権現

明蔵寺の良深和尚は里人の願いにより、佐藤が池の竜を野尻湖に追放しようと、佐藤が池の一望できる山に祭壇を設けて法を修し竜を野尻に追放した。

里人は喜んで相談の結果、この山を明蔵寺に寄進して、以後明蔵寺山と名づけた。

その後、野尻湖から、竜の所行あらあらしいために柏崎で引きとって欲しいという申し出でがあり、良深は再び法を修して同寺の境内清竜権現にまつり鎮守とした。

真光寺の観音

真光寺の観音は古昔中浜村の海底から出現した霊像という。

応永年間、柴野某という男、夢に竜宮出現の観音が、豊洲沖の海底にある事を知らされ翌朝沖に行って捜すに、海藻を身につけた二尺五寸程の観音像を得た。もち帰って自宅に安置し、後に銭山（八坂神社境内）の柏木の洞穴に収めた。

その後、中浜石橋藤太の子、漁に出たところ風のため行方が知れず藤太夫婦は、この観音の霊夢により、一心に祈願したところ、件の子供は板片に乗って帰って来た。

両親の喜び一方ならず、極楽寺の住僧とはかって、真光寺を建てゝ

観音をまつった。
明治四十四年十一月十三日、柏崎に大火があって、真光寺は燃えてしまったが、本尊はこの荒れ狂う火炎の中で、何等の異状もなかったという。

法禅寺島薬師

米山の薬師を山薬師といい、法禅寺の薬師を島薬師という。
島薬師を信心すれば、米山の山薬師をお参りしたと同じ霊験あると言伝えられて古来から信仰が厚い薬師であるという。

柏の大樹

柏崎という地名の起りは柏の崎というところから、きたものと言われている。
昔、鵜川の下流俗に「石なんご場」というあたりに、大きな柏の木が一本あったという。これが遠く沖を漕ぎ行く船頭さんの目印となり、いつとはなしに「柏の崎」と呼ぶようになり「柏崎」と名づけられたという。
（注）柏崎の伝説（市観光室）
今昔の刈羽郡（柏崎日報）にも所載さる。

柏崎勝長公

鵜川の柏の大樹の東北に柏崎勝長公という人の家があったという。
ある年、一子花若丸と家来の吉井小太郎をつれて鎌倉に行ったが病気で死んでしまった。花若丸は世をはかなんで信濃の善光寺に行って僧になった。家来の小太郎は柏崎に帰り勝長公の奥方にこの事を報告した。
夫はなくなり花若が出家したと聞いて、奥方は気が狂われて善光寺へ行き、ようやくにして花若丸に会った。
奥方は夫勝長公の形見のえぼし、刀、ひたたれなどを仏前にささげ夫の冥福を祈った。
やがて奥方は柏崎に帰り自分の家を香積寺に寄付し、自分は髪を切り落し尼僧となりて夫のぼだいをとむらわれたという。
（注）謡曲、柏崎にもある。

こおろぎ橋

香積寺の門前にこおろぎ橋という小さな橋がある。小さな橋で下水のふたと言った方がよい位。
勝長公の奥方が家を飛び出して狂気てんとうして、この橋を渡ったから、ころびで橋（転出橋）くるいで橋（狂出橋）といったのが転化して、こおろぎ橋となったのだと言われている。
この橋の上で転んだ人はきっとかたわになるし、この橋をなおし

た人は病気になるか、早死にすると伝えられている。

文使い地蔵

柏崎勝長に一人の娘があった。父勝長が鎌倉で病死したので悲しみのあまり一通の書をしたためて、この地蔵の手に結びつけ、「地蔵様のお力でこの手紙を亡夫に届けて、返事をもらって下さい」と頼んだ。

こうして三日目娘は地蔵に参ったところ、手に手紙を持っていたので開いて見れば亡父勝長直筆の返事であった。

この手紙、今なお香積寺の什宝の中にあるという。

（注）　柏崎の伝説（市観光室）
今昔の刈羽郡（柏崎日報）｝にも所載さる。

柏崎の古城あと

柏崎の古城あとは柏崎権頭勝長ここに住み鏡沖一円を領した。建保年中勝長鎌倉へ参勤した時、旅中で病死した。

従臣吉井小太郎が帰りて、これを告げたという。妻子は悲歎にたえかねて信濃国善光寺に行き出家した。

一族郎党相謀り館のあとへ菩提所、曹洞宗香積寺を移し寺地とした。

境内に勝長の墓という最も古代の石碑がある。

勝長の後えい柏崎日向守広重以来、数代当城に居した。香積寺の東北にあたり本城のあとがある。

秋葉さん

香積寺の境内に秋葉大権現の社がある。この秋葉さんは火防の神様で柏崎のいつの火事でも焼けたことがなく、また大火の時には予告して下さるという。

柏崎のある年の大火には香積寺も焼けたがこの秋葉さんだけは助かったという。この時の大火の真最中竹竿の先に白い旗のようなものが見えたということがある。

一説には女房の腰巻を旗の様に高く掲げると火災はのがれると言っている。

（注）白い旗というのは、女の腰巻でありましょう。私娼を柏崎では白二布（ゆもじ）と言うとあります。

立ち地蔵

柏崎市の近郊に一人の農夫があり、子どもが生まれたが、この子ども四才になっても歩けない。

心をいためていた農夫の枕元に、ある夜、立ち地蔵があらわれて「私を信心すれば子どもは歩けるようになる」と言われたので、夫婦は子どもを背負って、毎日柏崎の立ち地蔵に日参したら、一週間

目でその子どもは歩けるようになった。その事があってから立ち地蔵は腰の病気の仏様として参詣人で賑わったという。

（注）明治十一年明治天皇北陸御巡幸のみぎり、道路の中央にあったものが今の地に移された。

ねまり地蔵（その一）

柏崎の西端に大きな石仏があった。笠島の人達が魚や薪などを売りに来るとこの地蔵様に荷物をのせて休み場とした。

ところが雨風で石地蔵のまわりの砂が飛散して、大穴があいたので土地の人が砂をかけて埋めた。間もなく柏崎に大火が起きて、その付近一帯全焼したので、

「これは地蔵を埋めたためであろう」

と、石地蔵を掘り出して見たら、左に月光仏、右に日光仏を従えた立派な薬師如来であった。石薬師ともいう。

（注）白川風土記

この石仏を石薬師と書いてある。四方五尺余りの建石で三尊の坐像が彫刻されている。

明治十一年この地に移さる。

（注）塔の輪の地蔵沢にあったものだといわれる。

ねまり地蔵（その二）

越路のしるべに、このねまり地蔵を火除け地蔵とて昔より、この間に火災なし、と記されている。

この火除け地蔵は昔街の真中にあったのを明治十一年御巡幸の時、邪魔になるとて南側の桜屋の塀内に移した。

そのためであろうか。

明治十三年に、すや火事の大火あり

明治三十年に、日のや火事あり

明治四十四年に、とうゆ屋火事あり

地蔵もあまり動かされては、火除けの株もさがったものと人々の口の端にのぼるようになった。

小町いなり

永徳寺の境内の稲荷さんを小町稲荷とも学者稲荷とも言っている。小町に沢田という手習いの師匠が住んでいて寺子屋を開いていたからであろうか。

この稲荷さんのお堂の下から文字を書いた小石がたくさん出て来た。朱書のものも墨書のものもあった。これが評判になって大繁昌した。

またこの稲荷はコンコン、クワイクワイと鳴いて火事を知らせたと言う。酢屋火事でも日の屋火事にも毎晩お鳴きになったという。

ある時、この町内の悪童がおいなりさんに上った油揚を盗んで食った罰で、その場で、あき目くらになった。親達が心配して永徳寺住職にお伺いをたてると

「この大門のお稲荷さんのお堂の中で隠されている。これは稲荷

さんの油揚を食った罰だ、盗んで食べた油揚の倍の数だけ上げて、おわびして子どもをお返し願うことだ」といわれたという。

末広稲荷

末広稲荷は昔お杉稲荷と言って女性の信仰を受けていた。このお杉稲荷がそばを食べに来たという話がある。

美しい女の姿になって、そばをたべると一文銭を渡して消えるように出て行ったという。

その事があってから、そば屋の銭箱の中には決って一枚の木の葉が入っていた。その後、都屋の稲荷とお杉稲荷と一緒になったが都屋稲荷が夢でクワイクワイ鳴いて、お杉稲荷と一緒になっているのはどうしてもいやだというので、また別れて都屋稲荷は新花町の新しい堂におまつりした。

お杉稲荷は末広稲荷と改名された。

おしの皇子

八坂神社を昔は「みなと祇園社」といった。この神社の伝説に次のような話がある。

昔、まきむけのたましろ宮の御子に品津別皇子という、おしの御子がおられた。宮はこれを心配されていたが皇子が七才の時、空を飛ぶ鵠（くぐい）を見て、

「あれは何という鳥ぞ」と初めて問われた。宮は驚喜されて家来に（大鵠という）

「あの鳥を生けどりにして来い」とお命じになった。家来は鵠を追って信濃の国からこの柏崎まで追いかけて来て、柏崎の浜の人にわな網をはらせて、鵠をつかまえた。それからこの地に一社を建てられ、宮の信仰を得たという。

（注）一説　鵠―俗に白鳥という。

この伝説は和南津村の伝説にあり八坂神社の縁起にも記入されている。

ぎおんさんときゅうり

昔のお祭りは八坂神社、石井神社、柏崎神社の三社のおみこしが一緒に出て、いつもいつも氏子のけんかがあったものだという。だから「柏崎のけんか祭り」といわれていた。

ある年、このおみこしがけんかしたところ八坂神社のおみこしが負けてキュウリ畑に追いつめられたが氏子一同けがもなく命が助かった。

それからというものは八坂神社の氏子はお祭りの日には神様にキュウリを上げてお礼を言い、それまでは自分達は決して食べないということである。

八坂神社の御紋がキュウリであるのは、この時の命拾いした記念だといわれている。

鵜川と鯖石川の恋仲

鵜川の川尻は海より、さかよせる荒波のため東へ東へと曲っていく、どんなに護岸工事をしてもききめがない。鯖石川の川尻は海から吹きつける風にはばまれて西へ西へと曲っていく。越後の川はみんな東に向って流れるのに鯖石川だけが西に向って曲って流れるのは不思議な事とされている。

昔は二つの川は川面に、さざなみのほほえみをたたえ川岸のあしの葉をささやきかわした程近寄っていたという。昔の人はこれを見て鵜川が同じ黒姫山から流れる鯖石川とちぎりかわした恋仲だから、下流でよりそうのだと語っている。

そして鵜川を右川、佐橋川を左川といっていた。

柏崎と堀部安兵エ

堀部安兵エの父安之助は芸者狂いをしたので勘当されて柏崎の浄土寺門前で手習い師匠をしていた。ところが病気になってだんだん貧乏になった。

ある日、安兵エがはたごやみすや前を通ると老武士が急病をわずらった下僕に印籠の薬を与えたら、たちまち快癒した。

子ども心にこれを見て父安之助にその薬を飲ませたいと、その印籠を盗んで逃げ出したが魚場の石薬師の所で捕えられた。安兵エは隠さず父の病気の事を話すと老武士は驚いて、さっそく一通の手紙と五十両を添えて父に与えよと渡した。

安之助はその話を聞き、その手紙を見てこれは驚いた。老武士というのは安之助の父、安左エ門であった。安之助は安兵エを連れてみすやに行ったが既に父安左エ門は出立したあとであった。

後を追って悪田の渡しまで行ったが遂に間に合わなかった。

そこで安之助は父上にわび状を書き、安兵エに祖父のあとを追わせ、その養育方を依頼し、自分は新田のはずれの地蔵の前で切腹して死んだ。

安兵エは祖父のもとで生長し、やがて一生に三度の仇討をした。

柏崎の海鳥居

元禄のころから柏崎の沖の海中に鳥居が見えることがあると伝説が伝えられた。

あるいは鳥居岩と称するものあり、船に乗って行く時海中に見えるこの鳥居岩について、

○不動院縁起には、大同年中弘法大師がおいでになった時、この岩を見て「天竺の石窟によく似ている」といって、しばらくおとまりになった岩で当院ゆかりの岩だ。

○えんま堂縁起には、えんま堂北門なりし鳥居岩、この外はかり岩だと言われる岩もあったとも伝えられている。

○浄土寺言伝えには、浄土寺庫裏岩だと

○柏崎神社考には、柏崎の宮の鳥居岩が海中に没したものだと

○八坂神社の文書には、もとこの地に八坂神社があったものとそれぞれ記されている。はてさて、どこにつながる岩であることか。

長吉の涙雨

慶長のころ、栃尾の長吉という者、親方の妻を奸姦し、捕えられて新町扇屋の裏の牢屋（現在中央公民館西裏）に入牢。取調べの末、磔殺ときまる。磔柱に縛せられた長吉が「北国の風にふかれてちるもみじ」と上の句をよんで見物人に向って、「どなたかこのあとをつけて下され」という。その時、春日村の小林兵吉という者、「思いのままになびく極楽」と大声で返歌したので長吉はにっこり笑って惨形をうけた。

長吉が磔殺さるるや海上に竜が尾を下げ、三所より海水をまきあげた。たちまち雨になり、風となり、竜は柏崎の浜から栃尾の方へ向って行った。

この大風雨を見物人は長吉の涙雨といった。

磔柱は船の遭難の守りといわれ、翌日この柱をけずりとるものが多く、四角の柱が丸くなったという。

（注）甲子楼文庫に「慶長のころ」とあるが、柏崎市史年譜には慶応三年九月五日と明記された史実である。殺人事情についても伝説と異る

駒留石

鵜川町（西本町三）の浄興寺に「聖徳太子駒留石」というものがある。

天然石に馬のひずめの様な穴が一つあいている。また境内に聖徳太子を祀ったお堂があって、毎年八月一日・二日には太子講といってにぎわったものという。

笠降金ぴら

広小路に柿村と小づち屋の二軒の家があった。柿村の家は法衣家（ころもや）であった。小づち屋は余り豊かではなかったが神仏の信心が厚かった。

柿村は毎年京都へ法衣の仕入れに行っては時には四国へ渡って金ぴらさんをお参りしてくるので、ある年小づち屋が日ごろたくわえたお金を頼んで金ぴらさんのお礼をお受け申してくれと頼んだ。

柿村は四国へ渡り金ぴらさんをお参りした時、誤って小づち屋から預ったお金を賽銭箱の中に入れてしまった。この事を社務所に話したが社務所では取り上げてくれなかった。仕方なく柿村は自分の金を出して小づち屋に頼まれたお札をお受けして帰りの船に乗った。

いよいよ船が出ようとした時、天から何やら、ひらひら降ってきて柿村の笠の上にぴたりと落ちた。取りあげて見ると金ぴらさんのお札であった。

中浜のこくぞう庵には「笠降りの金ぴら」というお堂があり、この縁起を書いた額もある。

浄興寺のおあねさん

浄興寺のおあねさんの勢いは偉大なもので、ある日おあねさんの座る場所に寺男が座ったところ、足腰が立たなくなった。おあねさんが来て「許す」と一言いわれたので、やっと足腰がたったという。

また、ある日おあねさんの下駄にとまった雀が羽をばたつかせて飛べなくなったのをおあねさんが見て「許す」といわれたら、雀は飛び去ることが出来た。

おあねさんの死後、遺品が庶民の手にわたって汚されるという深慮から、これを燃やしてしまった。そのあとを灰塚又は衣裳塚という。

（注）浄興寺は真宗浄興寺派の柏崎別院、ここでいう「おあねさん」とは、是心院の息女「お蝶の方」でないかと言われている。又柏崎に「おあねさん」という称呼はこの方が最初であると言われている。

ベラさん

柏崎の納屋町にベラさんという人があった。若い時上州（群馬県）の酒作りの仕事をしていた。ある時、山道で大きな蛇にあって、それを殺してしまった。

酒神さん（松尾神社）は長物は大きらいと言われ、酒屋では鰻やどじょうなどの長物は食わない程の気のつかい方だったので、ベラさんが蛇を殺したという事が知れると

「とんでもない奴だ」

と、ひまを出された。

家に帰って来たベラさんは、蛇のたたりで、神経病になり、始終蛇の幻影になやまされ、時々蛙などを食ったり、ドタドタとあばれまわり、のたうちまわって、いつも生きずのあとが絶えなかったという。

家伝薬

光円寺（東本町一）の五香湯は風薬
専福寺（東本町一）の目薬は　二度ときかぬと言われながら有名になる。
行通寺（城東町）の安仲丸は　しゃく病によろしい。
西川（東本町三）の丸薬は　ごかんの薬
西巻（西本町一）の精綺水は目薬
郡司（西本町一）の神明膏は　先祖伝来のこうじや目薬
荒町（大久保）の貝薬は　シロシタの妙薬
黒崎（中浜）の無二膏　井戸に落ちた馬でも吸いあげる吸い出し膏
小熊鋳物師（大久保）の漢方薬　中風に効く

民間伝承療法

西光寺（大久保）の　いぼ地蔵
　いぼ地蔵の前の花立ての水をつければ　いぼはとれるという
赤坂山（吉井）の　三枚石
　この石に生えるこけは　むし歯の妙薬・おこりにもきくとして
　はぎ取る者多し
安田のさいの神
　つんぼが信心すれば　なおると言う
大沢峠（南鯖石）の榎水
　大沢峠の頂に大榎があり、そのこぶ穴にたまる水は、眼病にきく
　という。
鵜川神社（新道）のこぶ清水
　いぼをとるにききめあり
弁慶の硯石（塔の輪）
　硯石の中の水は　眼病にきくと伝う
番神さんのお水
　はやり目に　ききすぎるという
不動院（土合）の　いぼ清水
　えぼ・眼病にきくという
矢田（中通）の藥にお
　藥におの風化し土と化したものは　きず薬としてききめありと云
　う
中村（北条）の　大杉
　乳のでない人が信心すると　ききめありと伝えらるる。

柏崎地名考

主文中の現町名は昭和年代改生前の町名

柏崎　柏木の生い茂った岬から呼称されたという。昔はこの柏森を目印しに　航行したとも言わる。
川町・谷町・長町　現本町一丁目　貞享年中長谷川新五ざえ門が開拓した起こした町なので長谷川の名をとって三町としたと。
扇町　旧市街最西端　八坂神社附近　末広がり扇のかなめの町という意味か　もと橋場町という。
大町　古くから出来た町　柏崎の宿の繁華街の中心　現本町二丁目
中町　現本町三丁目　大町と今町の間の町
今町　現本町四丁目　慶長の頃　柏崎の駅場となってから急に開けた町
下町　現本町五丁目　大町・中町・今町の下すじに出来た町
新助町　現本町六丁目の北側　開拓者高桑新助の時、天和検地帳に屋敷地として載る。
南方町　現本町六丁目の南側　南側の片側町として出来たので明治四年南方町とつける。
新田町　現本町七丁目　市川氏が砂地を開発して人家を建てたので新田という。
焔魔町　現本町七丁目南側一部　閻魔堂を中心にして出来た町
下新田町　市川喜七氏の開発になる町屋敷
　現本町八丁目　更に本町八丁目の北側を新屋敷町と呼ぶ事もある。

諏訪新田　現スワ町一丁目と二丁目の一部
旧名悪田小路　町役人により町屋敷となり諏訪社をたてたので
諏訪新田とよぶ
市川新田　現スワ町二丁目の一部と三丁目
市川氏が整地して人家を建てた。
川端町　ウ川の川端に沿うた町　現ウ川町
橋詰町　現ウ川町　水道橋のたもと　ウ川にかけた橋（こおろぎ橋）
詰にできた意か
嶋町　現島町　湿地帯で漸く住宅街になる
高畑　現旭町一丁目　附近は湿地で　高い畑地に人家がならんだ。
浦町　現旭町二丁目　裏通りの町の意か
寿賀町　現旭町二丁目　遍照寺門前　スカは湿地の意という。
納屋町　現港町一・二・三丁目　回船関係の物品格納庫（納屋）群
があったのであろう。
法華堂下町　浄願寺の東横　納屋町の高台に法華堂がたてられ　その下町であった。
四ツ家町　納屋町東北端　現港町三丁目の一部　当時全戸四戸しか
なかった。
銭山　八坂神社境内　元和の頃柏崎永字小間銀を鋳造した所から
銭山という。
御坊町　五坊町とも書き　ゴゴ町ともいう。
浄興寺を中心とした町
魚場　元禄年中より魚市場がたつ　現本町三丁目の上部
宮川屋敷　宮川四部兵の屋敷のあった所　現柏崎神社大門の西側
木戸の内　松平越後守時代に　現渡甚書店前に木戸を建て　西側を
木戸の内　東側を木戸の外と呼んだ。
多聞新地　常福寺門前　常福寺に多聞天を安置する所からか。
八坂新地　市川氏天王社前の荒地を起して、天王新地と呼ぶ　後天
王社に代って八坂神社となり　八坂新地と改称
新今町　現在住吉町の一部　妙行寺門前　今町の裏通りの意か
寅新田　現市庁舎附近　元禄十一年寅の年の改め新田だったので寅
新田という。
田の頭　一中グランドから海岸公園にかけて天保年間　田頭為ヱ門
が　この浜の溜池を利用して新田を起す。
地尻（池尻）　聞光寺裏から広小路にかけて農業用灌漑水系の末端
低湿地なるによりこう呼んだのであろう。
伊勢堂　現田町の中央部　神明社（お伊勢さんとも言う）をお祀り
していた
地獄田　武田洋品店の裏附近の湿田　田の面にいつもブクブク音を
たてて　メタンガスが出ていた。

柏崎街路考

主文中現町名とあるは昭和年代改正前の町名

天王小路　現本町一・二丁目境で北側に入る小路。八坂神社の前身
天王社に通ずる小路
稲荷小路　ねまり地蔵の小路。現高忠の山に稲荷社があり、そこに
通ずる。
手屋（たや）小路　現消防署に入る小路　現消防署の位置に陣屋

（田家・手屋と呼ぶ）がありそれに通ずる小路。

遊行小路　しなのや横の小路　この奥に遊行派一念寺があり、遊行上人教化の時　この小路を通られたという。

この小路に娼婦宿があったといわれ、一名うきみ小路とも呼ばれた。

なまね小路　高木医院におりる小路

あだ名なまねさんという人が住んでいたという。明治末第一火防線となって、小路がひろげられた。

長井小路　立地蔵の向い側の小路

角に本陣長井宅があった。いろはやがいたので、いろはや小路ともいう。

広小路　上条に通ずるこの小路は、巾十一尺もある広い小路だったので広小路という。その後　第二火防線となって、更に広くなった。

納屋町小路　本町郵便局横の小路。納屋町に通ずる。納屋町の人人によって開かれた。明治末　更にひろげて第三火防線とした。

火防線小路　納屋町小路の反対側　会田写真館におりる小路　明治三十一年　屋敷をつぶして小路にし、第三火防線となる。

鍋屋小路　中惣金物店の横。鍋屋紋エ門が住んでいた。後に御家流の師匠徳原泰輔が居住したので御家流小路ともいう。

土粉小路　文化書院の横。戊辰の役の時、官軍の使者が馬もろとも小路の井戸に落ちたので、ドブン小路だという。

戦国の末　ここに娼婦がいて、銀五分で春をひさいでいたので五分小路ともいう。

御金蔵小路　柏崎日報社横、柏崎保育所附近に御金蔵あり　その通行路、なお途中（浄願寺附近）に牢屋があったので、牢小路とも言った。

御倉小路、元太陽銀行横、この小路の奥の砂原に御蔵があった。後に朝倉文助氏が住むようになり、朝倉小路と呼ばれた。

浄敬寺大門　丸万電気店横、もとの町小路

町小路を承知の上で、寺を建立したが、通行を遮断する事は許されなかったという。

諏訪小路　大光相互銀行横、この小路の奥に柏崎神社の前身諏訪宮があった。後にこの小路の下り口に　けんどん屋という名代のうどん屋が出来たので、けんどん屋小路とも呼ばれた。

山田小路　現柏崎駅通り、下山田の東脇にあった細小路、明治三十年、柏崎駅ができた際　道路はとりひろげられ、第四番火防線となり、駅通りとなった。

星野小路　現信用金庫横、小路の西に星野鷹兵えの家があった。

荒木小路　戸田印判店の横、高野屋荒木氏の住居があった。

藤沢小路　現柏崎高校大門

その昔は火葬場に通ずる道だったので焼場小路といわれた。後火葬場は東に移転し、小路の東に藤沢氏の住居があったので　藤沢小路といわれ、明治末第五番火防線として拡張された。

だび小路　この奥に茶毘（だび）場があったので　この小路名が起きる。税務所に通ずる小路、小路の途中に釈迦堂あり。火葬された遺骨はここで受け取った。

権現小路　ときわ洋品店横の坂、この町内の鎮守権現社が小路の南端にあった。現在第六火防線となって拡張される。

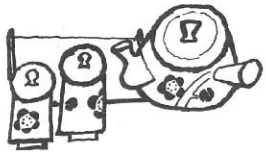
宮小路　遠山漬物店の横、小路の奥にこの町内の鎮守諏訪社があっ

た。

又この小路に遊芸に達した正之市という盲人がいて、近在の盲人の出入りが絶える事がなかったので、座頭小路という。

伝助小路　東北電力会社に下りる坂

真貝伝助の屋敷があった。

津出し小路　スワ町から裁判所前に出る小路　古見野の御蔵から、津出しに使った道。

中道通り　現学校町の通り、享保の頃は中道通りと呼ばる　後中仙道とも呼ぶようになった。